

やまと 民俗への招待

鹿谷 熱

法華寺、法隆寺、奈良市押上町と蒸し風呂の事例を紹介してきた。入浴方法には古来、蒸気浴と温湯浴があり、前者が「風呂」、後者は「湯屋」と呼ばれてきた。今日はのように湯に体を浸す温湯浴が主流となつたのは、江戸時代後期以降のことだ。それまでは風呂といえど蒸氣浴のことだった。この蒸氣浴には、石風呂や竈風呂のように、天然の岩窟や石を積んで空間の中で火をたいて熱してから、水を打ったり濡れ筵などを敷いて水蒸気を発生させてここに入るものもあった。山口県では石風呂が多く残り、京都では八瀬の竈風呂が知られている。

入浴施設は古代の寺院の財産目録である『資材帳』を見ると既に姿を見せている。東大寺、大安寺、法隆寺、西大寺には「浴室」「温泉」が設けられていたが、奈良時代から寺院に沐浴施設が付随していたが、その実態は残念ながら明らかではない。寺院にこうした施設があることは、『続日本紀』の天平9(737)年8月2日条に「四畿監と七道の諸国との僧尼に清淨沐浴せしむ」とあるように、法会に際して身を清める事が求められていたためと思われ、これは炎暑の国インドに起った仏教団で沐浴が行われたことが伝わったものと言われている。

奈良県内には、東大寺、法隆寺、興福寺に今も大湯屋が残されているが、これらは蒸氣浴ではなく、掛け湯、取り湯の方式ではなかつたかとされている。



筆者撮影

興福寺多聞院の院主が記述すると、15世紀後半から江戸時代初めに記した『多聞院日記』を見ると、石風呂の記事がたびび登場する。天正11(1583)年閏正月には「石風呂」火、ナマケシニテ「増長院が焼をしてしまつたことや、天正19(1591)年3月に、慈尊院に5、6年小姓として召し使われていた15歳の深川(旧都郡村の深川)か、出身の男が亡くなった時には、「ハシカノ後、程なく石風呂へ度々入り、其タタリか」と不憫がつっている記事もある。儀式などに用いられる大湯屋とは異なり、度々使える入浴施設が興福寺境内で用いられていたことが分かる。

奈良県内には安堵町塙田の重要文化財中家住宅に、戸棚風呂のような小

規模な蒸氣浴施設も残っている。江戸時代中期に刊行された『大和名所図会』や社寺の境内図などを見ると、菩提山正暦寺や忍辱山田成寺、法輪寺や河合神社などに「浴室」があることが分かり、蒸氣浴施設であるかどうか確証はないが、類例はまだあると思われる。吉野の奥地、室町期の小歌踊りの系統とされる旧大塔村の篠原踊りの歌の中には、その名も「お風呂踊り」という曲が伝えてられている。

大和は「風呂の王国」

(奈良民俗文化研究所代表)
次回は11月11日